

小学校

平成6年度

教育研究員研究報告書

国語

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿

低・ 中学年I 分科会	千代田	麴町小	□横山都美子
	目黒	駒場小	平原真理子
	大田	山王小	青木香苗
	杉並	桃井第二小	鈴木真理子
	足立	綾瀬小	◇早坂ひとみ
	三鷹	第一小	川口雅恵
	三宅	三宅小	野間君彦

高 学 年 I 分 科 会	台東	金曾木小	○小林一枝
	品川	芳水小	沼田操
	大田	東調布第三小	村田ゆうこ
	練馬	光が丘第三小	森川勉
	葛飾	東柴又小	三浦猛義
	世田谷	多聞小	中澤昭子
	豊島	千早小	□永瀬登志子
	練馬	開進第三小	◎寺島一之
	江戸川	臨海小	梅原与志子

低・ 中学年II 分科会	江東	第三大島小	深津郁子
	北	桐ヶ丘小	□伊藤浩介
	板橋	志村第四小	野口智恵
	足立	花畑西小	外川澄子
	葛飾	花の木小	佐原愛子
	江戸川	新田小	町田盛子

高 学 年 II 分 科 会	新宿	落合第四小	□新井雅晶
	世田谷	笹原小	伊藤富美子
	中野	桃園第二小	竹山弘志
	昭島	田中小	濱野裕美
	町田	町田第三小	鈴木昌枝
	日野	日野第一小	小川賀世子
	八王子	片倉台小	市川澄子
	国分寺	第六小	田中淑恵
	保谷	東伏見小	佐藤和枝

低・ 中学年III 分科会	瑞穂	瑞穂第四小	□中村匠
	調布	富士見台小	成瀬マリ子
	羽村	羽村東小	野崎和広
	八王子	第三小	重近祥子
	武蔵村山	第五小	◇野崎甫

◎全体世話人 ○全体副世話人
□分科会世話人 ◇全体記録

担当指導主事 坂 東 文 昭 教育庁指導部初等教育指導課

目 次

I 共通研究主題	相手や目的に応じて適切に自己を表現する力を育てる学習指導	… 2
1	共通研究主題設定の理由	
2	共通研究主題に対する基本的な考え方	
3	研究の全体構造	
II 研究の内容		
1	相手や目的に応じて適切に表現しようとする態度・技能の系統	… 4
2	各分科会の研究	
○	低・中学年Ⅰ分科会	
	「相手を明確にして、自分の思いや考えを個性豊かに表現する学習活動」	… 5
○	低・中学年Ⅱ分科会	
	「一人一人が意欲をもって聞き、自分の言葉で表現する学習活動」	… 9
○	低・中学年Ⅲ分科会	
	「相手や目的を意識して表現する音読学習」	… 13
○	高学年Ⅰ分科会	
	「自分の考えを確かにするための話し合い活動 —— 説明的文章を手がかりにして —— 」	… 17
○	高学年Ⅱ分科会	
	「自分の考えを広げ、深めることのできる話し合い活動」	… 21

<要 約>

本研究は、音声言語による「相手や目的に応じて適切に自己を表現する力」の育成を目指し、「基礎基本の徹底」と「個性の伸長」の側面から学習指導の在り方を追求したものである。

各分科会では、学年の発達段階に応じて様々な表現力育成の場面を設定し、調査研究・授業研究によりそれぞれの課題について実践、考察した。

I 共通研究主題 相手や目的に応じて適切に自己を表現する力を育てる学習指導

1. 共通研究主題設定の理由

これからの社会において児童が心豊かにたくましく生きていくためには、相手の思いや考えを正確に理解するとともに、それぞれが自己のよさや可能性を発揮して自分の思いや考えを適切に表現することが大切である。

児童は、毎日の生活の中で様々な方法を用いて自己を表現しようとしている。さらに言語を用いて適切に表現する能力が育成されれば、これまで以上に表現する喜びを味わい豊かにたくましく生きることができると思われる。

そこで国語科においては、児童が自ら学ぶ意欲をもち、思考力や判断力を働かせながら相手や目的に応じて適切に自己を表現するための学習指導の在り方を究明することが重要であると考え、上記の研究主題を設定した。

なお、本研究では、上記の理由から特に音声言語による表現力育成を取り上げ、話す・話し合う・音読・朗読などにかかわる指導法について研究を進めることにした。

2. 共通研究主題に対する基本的な考え方

共通研究主題を「基礎基本の徹底」と「個性の伸長」という側面からとらえ、それぞれから求められる「表現の適切さ」について明らかにしたいと考えた。そこで、本主題を以下の二つの観点から分析し、学習指導の改善を目指すことにした。

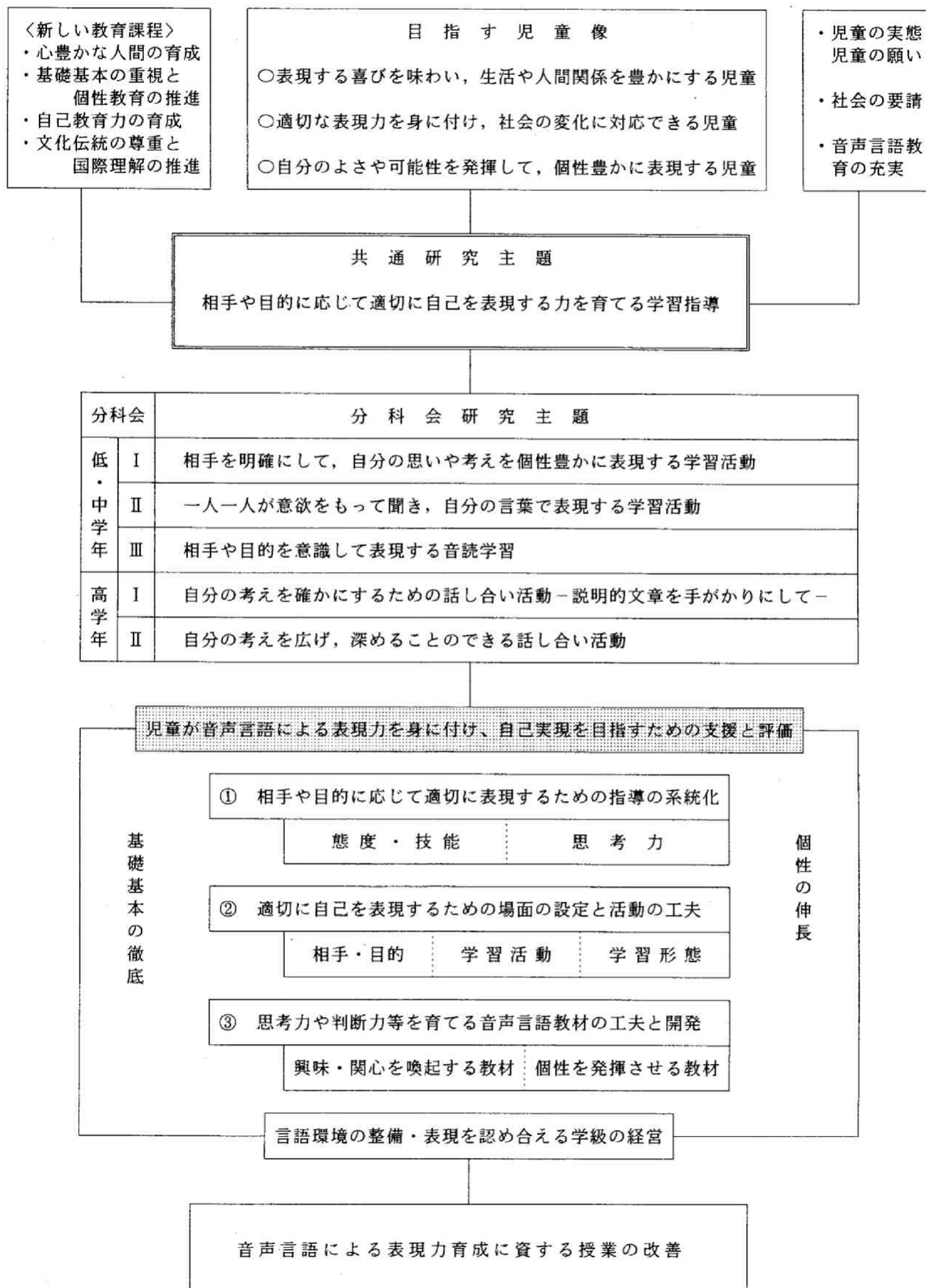
(1) 相手や目的に応じて適切に表現する。

「相手や目的に応じて適切に表現する」とは相手や目的を意識して分かりやすく表現するということである。そこでは児童の発達段階を踏まえ、系統性を考慮した学習指導を行う必要がある。そこで、「相手や目的に応じて適切に表現しようとする態度・技能」「育てたい思考力」の系統を明らかにして学習指導を展開しようと考えた。また、相手や目的に応じて適切に表現する学習は、それを児童の生活と関連させることが重要である。生活に役立つことを実感することによって相手や目的に応じて表現することの必要感や有用性が生まれ、児童の主體的な学習活動が期待できると考えたからである。

(2) 適切に自己を表現する。

「適切に自己を表現する」とは伝えたい思いや考えを自分なりに工夫して分かりやすく表現するということである。そのためには、表現する場面を設定する際に、それぞれの児童の実態を基に「相手・目的」「学習活動」「学習形態」に配慮した学習指導を構想する必要がある。また言葉によって自分の思いや考えを豊かにし、それを表現するためには、まず、読むこと・読み返すこと・聞くこと・聞き返すことなどの理解活動を繰り返すことにより、内言活動を活発にすることが大切である。このことによって、その表現が、単なる思いつきの表現ではなく、思考力や判断力を駆使した効果的な表現に高められるものとする。そこで学習指導では表現するまでの過程についても重視することにした。

3. 研究の全体構造




II 研究の内容

1. 相手や目的に応じて適切に表現しようとする態度・技能の系統

児童の音声言語能力を向上させるためには、その系統性をよく理解したうえで、指導のねらいをはっきりさせて指導することが大切である。そこで、児童の実態と学習指導要領に示された各学年の目標に基づきながら、「相手や目的に応じて適切に話すこと」の系統について以下の観点から整理した。ここでは、相手の話を主体的に聞き取る態度と、自分の考えをまとめて話すために必要な論理的な思考力を一体的に育てることが重要であると考えた。

相手や目的に応じて適切に表現しようとする態度・技能の系統（話すこと）

学年	態 度 ・ 技 能	育てたい思考力
1年	◎経験したことを順序よく話す。 ・相手の顔を見ながら話す。 ・尋ねられたことに答える。	○経験を思い出す力 ○話題に必要な事柄を選ぶ力 ○経験したことや事柄を順序づける力
	・相手の顔を見ながら聞く。	
2年	◎事柄の順序を考え、整理して話す。 ・相手に向かってはっきりと話す。 ・相手の話の内容とそれないように話す。	○話題をとらえる力
	・うなずきながら最後まで聞く。	
3年	◎要点が分かるように、区切りを考えて話す。 ・相手に分かるように話す。 ・相手の話を受けて話題がそれないように話す。	○内容の軽重を考える力 ○分かりやすく伝えるために言葉を選ぶ力 ○相手の考えとの共通点や相違点に気付く力
	・分からないところは聞き返して正確に聞く。	
4年	◎中心点が分かるように、筋道を立てて話す。 ・相手に正しく伝わるように工夫して話す。 ・必要なことを落とさないように話す。	○話題の中心をとらえる力
	・必要なことを心に留めながら聞く。	
5年	◎意図や根拠を明らかにしながら話す。 ・相手の反応を確かめながら話す。 ・目的に合わせて話す。	○事柄の原因や根拠をとらえる力 ○事例を選びながら話の内容を構成する力
	・話し手の考え方、感じ方などを理解して聞く。	
6年	◎目的や意図に応じて適切に話す。 ・相手の立場を考えて話す。 ・目的に応じて効果的に話す。	○場面に応じて適切な言葉を選ぶ力 ○効果を考えながら話す力 ○話し手の意図をとらえる力
	・話し手の考え方、感じ方などについて、自分の考えをはっきりさせながら聞く。	

 は、相手や目的に応じて適切に話すために身に付けておきたい「聞く態度」

※「相手や目的を意識して表現する音読・朗読」の系統は、14頁に示している。

2. 各分科会の研究

低・中学年 I 分科会	相手を明確にして、自分の思いや考えを個性豊かに表現する学習活動
-------------	---------------------------------

I 研究主題設定の理由

低・中学年期の児童は、話すことに楽しさを感じ、学習にも活気を見せるようになる反面、話す相手が漠然としていたり、伝えるべき内容が自分にとってあまり興味のもてないものであったりすると、表現意欲が損なわれ、的確な表現が生まれにくくなることが多く見られる。こうした状況を改善するためには、(1)話す相手を明確にした活動を工夫し、適切に表現できるようにすること (2)伝えるべき内容に興味をもたせ、話したくなる場や状況を設定することが重要であり、そのための指導法について明らかにする必要がある。

相手意識を明確にもたせることは、話すことの基本的な指導である。児童は、伝えるべき相手が自分にとってどのような関係にあるかを認識することにより、言葉の使い方や内容を選択しながら効果的で適切な話し方を工夫するものと思われる。

次に、児童が話す活動に意欲的に参加できるような場を設定することが大切である。その方法として、児童が共感を寄せる文学作品を教材に取り上げることは、どの児童にも「好きな物語に対する思いや感動を語る」という共通の目的を持たせやすいため、自信をもって表現活動を展開するものと思われる。また、物語の登場人物になりきって十分に自分の思いを語らせることは、児童の表現意欲を一層喚起し、個性豊かな表現を引き出すことができるのではないかと考え、分科会研究主題を設定した。

II 研究のねらい

- (1) 場面に応じて適切に話すことができるように、相手意識のもちせ方を工夫する。
- (2) 自分の思いが個性豊かに表現できるような教材を選定し、その活用を工夫する。

III 研究の内容

1. 調査研究

- (1) 対象 分科会構成員の学校の第2学年、3学年、4学年の児童189名、7月実施
- (2) 目的 物語の登場人物になりきり、伝えるべき相手を明確にして自分の思いを表現する活動に対する児童の意識をとらえる。
- (3) 方法 物語「ヒキガエルとロバ」を読み、同じ場面の同じ人物についての考えを様々な方法で表現する。
- (4) 内容
 - ① 「ヒキガエルとロバ」の感想を書く。
 - ② ヒキガエルやロバになりきって、気持ちを吹き出しに書く。
 - ③ 友達と二人でヒキガエル役とロバ役に分かれて、鉛筆リレーをする。
 - ④ 鉛筆リレーでつくりあげた作品を二人で読み合う。

*①～④の中から楽しかった活動を選ばせる。
- (5) 結果 2～4学年までのどの学年でも、7～8割の児童が③④の学習が楽しい、と答えている。つまり、一人で感想を書いたり吹き出しに書いたりするよりも、誰か

と協力しながら考えたり書いたりしたことを登場人物になったつもりで音読するほうが楽しく、意欲的に取り組める、と自覚しているのである。

- (6) 考察 以上の結果より、ヒキガエルである自分からロバ役の友達へ思いを伝えるというように伝える相手をはっきりしていると、表現意欲が高まり、伝える内容にも自分らしさが表れやすくなることが分かった。さらに、この調査から、以下の2点を学習指導構想の視点としてとらえることができた。

- ① 二人以上の友達と協力しながら楽しく学習が進められる活動を工夫するとよいのではないか。
- ② 魅力的な人物が二人以上登場する文学作品を教材として選ぶと授業を組み立てやすいのではないか。

2. 学習指導研究

<実践例1>

- (1) 目的 上記①②の視点に基づき学習指導を行うことで、児童が個性豊かに表現するための指導法について追求する。
- (2) 方法 すでにあらすじや登場人物の心情について大体理解している「スイミー」を2年生の児童に再度教材として取り上げ、登場人物へのインタビューを行う。

(3) 学習計画の概要

単元名 「スイミーたちにインタビューしよう」(全4時間)

- ・1次 どの登場人物になりきって話したいか考えながら教材を読む。インタビュアーとそれを受ける人に分かれて話す内容を書く。
- ・2次 インタビュアーと受ける人に分かれてインタビューを行う。互いに適切な表現や個性的な表現を認め合う。
- ・3次 インタビューの様子をビデオに撮り、鑑賞する。(他のクラスなどに紹介する。)

(4) 本時の指導(3/4時)

①目標

- ・インタビュアーや受ける人(スイミーなどの登場人物)になりきって自分の言葉で話すことができる。
- ・友達の発表を聞き合い、よい表現を見つけようとする。

②展開

学 習 計 画	支援☆と評価★
1. 本時のめあてを確かめ発表メモを読みなおす。 海の生き物になってインタビューに答えよう	☆発表の意欲をもたせる。友達のよさを見つけながら聞くように働きかける。
2. グループごとにインタビューをする。	★相手を意識してどのように言葉を工夫して話したか。
3. 友達のよい発表を見つけ合う。	★友達の発表のよさを見つけることができたか。
4. 次時の計画を立てる。	

(5) 考察

①の視点から…… インタビュアーとそれに答える側にわかれ12～3人のグループで活動させたことにより、どの児童も自分らしさを発揮して意欲的に学習できた。

②の視点から…… スイミーとその仲間たち、そして彼らの敵としての大きなまぐろ。多彩な登場人物によって展開される海の物語に児童の心は引きつけられ、聞く方も答える方も、十分に活動を楽しむことができた。多様で個性豊かな表現も見られ、魅力のある文学作品を教材に活用することの有効性がとらえられた。

<児童の発表に見られた個性的な表現の例>

私は大きな海のインタビュアーののどかです。スイミーさんにお聞きします。大きなまぐろはこわくなかったですか。くわしく教えてください。⇒私はスイミーです。すごくこわかったです。みんなが助かっていればなあと、ため息を15回くらいつきました。

*2年生の段階では、児童相互により表現を見つけ合う活動はまだ難しい。よい表現に気付かせていくための教師の支援の工夫が必要である。

<実践例2>

(1) 目的 「スイミー」の実践を踏まえ、さらに児童が多様で個性豊かな表現を発揮する学習活動の在り方を探る。また、相互評価ができるような手立ても工夫する。

(2) 方法 副教材としてはじめに鬼を主人公にした脚本で遊ぶことにより、表現する楽しさを十分に味わわせ鬼についての関心を高める。次に、主教材として「おにたのぼうし」を取り上げ、おにたと女の子の二人に視点を当てながら心情を追う。最後に発展として、鬼の登場する物語を調べ、鬼とは何なのか、自分の考えをまとめて発表する。

(3) 学習計画の概要

単元名 鬼について考えよう（全16時間）

- ・1次
 - ・「鬼の住む里」の劇を楽しむ。
 - ・おにたとかよになって会話を楽しむ。
- ・2次
 - ・「おにたのぼうし」を読み、おにたと女の子などの登場人物に質問の形で初発の感想を書く。
 - ・女の子の様子や気持ちの分かる文や言葉にサイドラインを引き、自分なりの女の子像をまとめる。
 - ・女の子の前におにたが登場するまでの描写の中から、おにたの人柄や様子を表す表現を探し、おにた像をまとめる。
 - ・女の子の会話や様子の中から、おにたとかかわるところを選び出し、そのときのおにたの気持ちを考える。
 - ・「おにだって、いろいろあるのに、おにだって……」とつぶやいているおにたにインタビューをする。
- ・3次
 - ・鬼の登場する物語を読み、鬼について自分の考えをまとめ、発表し合う。

(4) 本時の指導 (12 / 16 時)

学 習 計 画	支 援 ☆ と 評 価 ★
<p>1. 前時までの学習を振り返る。</p> <p>2. 本時のめあてを確かめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">おにたにインタビューをしよう</div> <p>3. インタビューメモを読み返し、グループごとにインタビューと受け答えの内容を話し合う。</p> <p>4. インタビューの練習をする。</p> <p>5. おにたにインタビューをする。</p> <p>6. 心に響いた言葉や、おにたに対して言いたいことを発表する。</p> <p>7. 次時の予告を聞く。</p>	<p>☆女の子とおにたの様子や行動を思い出すよう助言する。</p> <p>☆おにたの気持ちが女の子によく分かるような質問を選ぶように助言する。</p> <p>★互いに個性豊かな表現を見つけられたか。(評価カードの工夫)</p>

(5) 考察

- ・ 主教材に入る前に鬼の劇を取り上げたことにより、児童は鬼についての興味・関心を高めることができ、ある人物になりきって話す解放感を味わえた。
- ・ いきなりインタビューを始めずに、聞く側にも答える側にも話す材料をメモやノートにまとめさせたことにより、児童は安心して学習に参加することができ、また、自分らしい表現をしようとする意欲をもつことができた。
- ・ 互いのよさに気付くような評価カードの工夫により、友達の表現の中から、言葉遣いの工夫や個性的な表現を発見することができた。
- ・ 伝える相手(聞き手)を女の子にしたことにより、説得力のある話し方をしようと努力し、その結果、多様で豊かな表現が生まれた。

IV 研究の成果と今後の課題

- 登場人物になりきって話すことにより、個性豊かな表現が引き出されるとともに、同じ気持ちを表す場合でもそれぞれに微妙な言い方の違いがあることに気付くようになった。(多様な表現の出現)
- 伝える相手を明確にすることにより、より具体的で説得力のある話し方を求めて工夫しようとする態度や技能が身に付いてきた。(話す態度や思考力の向上)
- 相手を明確にして、個性豊かに表現するための教材として、例えば「おにたのぼうし」や「ごんぎつね」のように、主となる人物が2人以上登場すること、葛藤場面があり、且つ心情が直接表現されていない作品が有効であることをとらえることができた。
- より一層個性豊かな表現を引き出すための学習活動の工夫と語いを豊かにするための日常学習の充実を図る。
- 児童にとって魅力的な人物が登場する文学作品を見つけ出し、話すことの教材として活用する。

I 研究主題設定の理由

音声言語によって互いの考えを伝え合い、相互に理解し合うためのコミュニケーション能力の育成が期待されている。コミュニケーション能力とは、相手を尊重し合いながら自分の思いや考えを適切な言葉で分かりやすく伝達していく力である。これは、児童が豊かな人間関係を築き、自らの人間性を高めるためにも大切なことである。知的好奇心や表現意欲の高まる低・中学年期に、生活や学習に生きてはたらくコミュニケーション能力の基礎を育てることが大切であると考えられる。

コミュニケーション能力の育成に当たって必要なことは、まず児童に聞き手としての主体性を確立させることである。音声言語は一過性の特徴を有する瞬間的な伝達手段ではあるが、それが話し言葉として表現されるまでには、話し手の中で様々に思考がめぐらされ練り上げられている。コミュニケーションを成立させるためには、こうした話し手の意図を理解しながら聞き、今度は自分が考えを構築して相手に適切に伝えることが大切である。相手の話を意欲をもって聞き、心の中で活発な内言活動を行うことが、話す意欲に結び付き、自分らしい個性的な表現も生み出すことになると考え、分科会研究主題を設定した。

II 研究のねらい

国語科の指導はもちろん、日常の生活場面や他教科・領域の学習との関連を図ることも重視して、以下の観点から意図的・計画的な指導を行う。

- (1) 児童の必要感に基づいた聞くこと・話すことの場合を設定するとともに、それに適した教材を開発し、これを取り入れた年間指導計画を作成する。
- (2) 教科書にある音声言語教材以外の教材についても分析し、聞くこと・話すことに適した場面を意図的に組み入れた授業を設計する。
- (3) 教師の言葉や掲示物などの言葉環境を整えるとともに、朝の会や集会などの日常的な場面における指導についても工夫する。

III 研究の内容

1. 調査研究

聞くこと・話すことについての児童の意識を調査し、児童にとってコミュニケーションがよりよく展開できる指導の在り方について考察した。結果の概要は以下のとおりである。

- 国語が好きと答えた児童の中にも、発表することに苦手意識をもっている児童は多い。その理由としては「話す内容が持てない」「話し方が分からない」「人前で話すことが恥ずかしい」などがあげられる。
- 4年生になると、自分の考えと他人の発言内容を比べて聞こうとしている児童が増える。

調査結果から、一人一人の児童が安心して話し、話したことを認め合える学級経営を基盤に据える必要性を痛感した。また、児童に話すことへの必要感を喚起させ、児童が相手意識をもちながら話す内容を豊かにしたり話し方を習得したりすることができる教材の開発が大切であると考えた。そこで、コミュニケーション能力を育てるために「思考力を育てる」と「話す必要感をもつ場の設定を工夫する」の二つの視点を設定した。

2. コミュニケーション能力を育てるための視点

<視点1> 思考力を育てる

事例(1) 「電話で大切なことを落とさずに伝えよう」(第4学年 3時間扱い)

- 単元の目標 ○ 相手に応じて、用件を正しく分かりやすく伝えることができる。
○ 大切なことと補足の部分とを区別しながら話すことができる。

指導の概要

時	学 習 活 動	主な指導事項・留意点
第1時	1. 電話をかけた時の会話をメモして持ち寄り、だれに何を伝える電話か紹介する。 2. それぞれの例で、会話がうまくいっているところを発表する。	○ あらかじめ取材すること。 ○ 二人組で再現してみることに。 ○ 要件を明確に伝えること。相手に応じて話すこと。声の大きさや速さ、マナーの観点を押さえること。
第2時	3. 教材文(欠席の友達を見舞い、明日の予定を知らせる設定)の録音を聞き、電話をかける時に気を付ける点を考える。 4. 教材文を、役割分担して練習する。	○ 必要に応じて大事な点をメモし、落とさず分かりやすく伝えること。
第3時	5. よく電話を使う場面を話し合い、練習する。 6. グループ(4人組)を組み、模擬電話で会話の練習をする。 7. うまくいったところ、工夫したいところを話し合う	○ 互いに顔が見えない工夫をする。 ○ 場面の設定例 ・転校した友達に学芸会の日時、演目を伝える。 ・いなかの祖父母に帰省の予定を知らせる。 ○ 観点を押さえ相互評価すること。

※ 本事例は、育てたい思考力(中学年)の「事柄の軽重を考えながら話す力」「分かりやすく伝えるために言葉を選ぶ力」の育成を主なねらいとして実践した。

事例(2) 文学的教材の解釈の分かれる点をとらえ、話し合いにより読みを深める。

①「ごんぎつね」(第4学年) 「ごんはいつからいたずらをやめてしまったのだろう。」

A児「私は○ページの死んだのが兵十のおっかあだとごんが気付くところだと思うよ。」

B児「確かにそれは分かる。でも、ぼくは、穴に帰って長くつぶやくところの『ちょっと、あんないたずらしなけりゃよかった』のところが、ごんが反省している気持ちが出ていると思います。(反論)

C児「だいたい賛成。ちょっと違うのは、その前の『おっかあはうなぎが食べたいと思いつながら死んだんだろう』の一言を付け足したほうがいいということです。そのほうが、ごんのしまったと後悔する気持ちが強く出るよ。」(肯定的反論)

D児「なるほどね。ちょっと意見が分かれたけれど、Aさん、言いたいことある?」

②「もちもちの木」(第3学年)「山の神のお祭りを見たあと、豆太はかわったのだろうか。」

③「三年とうげ」(第3学年)「トリトリの話を聞いて、おじいさんは元気になったか。」

※ これらの事例は、育てたい思考力(中学年)の「相手の考えとの共通点や相違点に気付く力」の育成を主なねらいとして実践した。

<視点2> 話す必要感をもつ場の設定を工夫する

事例(1) 「サイコロトークをしよう」(第4学年 3時間扱い)

- 単元の目標 ○ 対話をするを通して、相手と通じ合おうとする意欲をもつ。
○ 話題から外れないように対話を続けることができる。

<指導の概要>

児童が友達と話してみたいと思っている話題(「もしも魔法がつかえたら」「大人になったら何になる」など)を取り上げ、人間関係に配慮しながら組ませた4人グループの中で対話する単元である。サイコロを振って話題を選ぶという即時性や楽しさをもたせるようにした。2人が対話役、他の2人が評価役となる。評価役は対話の続いた回数を数えたり、対話が途切れたり話題から外れたりしそうな時に援助をしたりする。この事例は、音声言語指導の導入時に自分が相手の話を受け止めて返さなければ話が進行しないという場を設定し、対話をスムーズに進める力の育成をねらったものである。

事例(2) 朝の会、帰りの会でのスピーチ活動

- ①「今日のできごと」(第2, 3学年)……2年生では「主述をはっきり話す力」、3年生では「はじめ・なか・おわりを考えて話す力」の育成をねらって実践した。
- ②「思い出の写真」(第3学年)……写真という具体物を用い、「メモをもとに要点を押さえ、内容をふくらませて話す力」の育成をねらって実践した。
- ③「学校から家までの道順」(第4学年)……転入生に自分の家の方向やかかる時間、目印や行き方を教える設定で実践し、「見通しをもって筋道を立てて説明する力」を育てることをねらいとした。

3. 学習指導の実際

(1) 単元名「この人だあれ——特ちょうをとらえて分かりやすく話そう」(第3学年)

(2) 単元の目標

- 互いにより深く理解し合うために「この人だあれクイズ」に進んで参加しようとする。
- 友達の特徴を正確に聞き取ることができる。
- 友達の特徴について簡単なメモをとり、区切りを考えて話すことができる。

(3) 研究主題との関連

3年生になると、児童は人とのつながりを強く意識し始めるようになる。人間関係にも広がりや深まりを見せ、特に自我意識の芽生えから友達の特徴や様子、考えていることなどに強い関心を寄せる。このような時期に、友達の持っているよさや特徴をとらえ「この人だあれクイズ」にして出題するという単元を設定した。クイズという方法を取り入れることにより、3年生になったばかりの児童が人間関係を深めながら、楽しく意欲をもって話したり聞いたりする活動ができるようになるのではないかと考えた。

本単元では、単元の構成を、(友達の情報を)聞きたい → 聞き取る(クイズに答える) → 話したい(出題する) → 適切に話す(出題したり解答したりする)という過程が踏めるように工夫した。児童が話す意欲を高めながら、大事なことを落とさずに聞き取ったり、必要なことを聞き返したりする力を身に付けるとともに、クイズの出題のために必要な言葉を選び区切りを考えて話す力を体得することが大切であると考えたからである。

(4) 指導の概要 (4時間扱い)

時	学 習 活 動	支 援
第1時	1. 新しい友達同士で、もっとよく知り合うために「この人だあれ」クイズをすることを 2. 自分のことを「これが本当の私です」カードに書く。	○ 個に応じた自己紹介の観点を示す。 (例) 好きな食べ物 ・ 将来やってみ たいこと ・ 自分の宝物 ・ 得意なこと ・ 趣味 など
第2時	3. いくつかの観点を 4. 必要に応じてメモをとったり、もっと知り 返したりする。	○ 自己紹介の仕方を ・ 適切な声の大きさと明瞭さを ○ 大事な言葉をメモするよう助言する。
第3時	5. クイズのやり方を とらえ「この人だあれ」クイズの出題をする。	○ メモをもとにクイズの作り方を示す。 ○ 一つ一つの特徴を、区切りながらはっきり出題できるように助言する。
第4時	6. 「この人だあれ」クイズ大会をする。 7. 自分の聞く・話す活動を振り返り、がんばりカードに書く。	○ 自己評価の観点を示す。 ・ クイズをよく聞くことができたか。 ・ メモをとり、クイズをうまく作れたか。 ・ 作ったクイズを分かりやすく話せたか。

IV 研究の成果と今後の課題

< 成 果 >

- 聞くこと・話すことと思考力との関連を考えながら指導を行った結果、学習場面ごとに、どのような思考力が働くか、どのような思考力を育てなければならないかということが明らかになってきた。
- 相手や目的に応じた学習場面の設定、単元構成や学習活動の工夫をしたことは、児童の話すことへの抵抗を取り除き、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようになった。
- 相手に分かりやすく自分の考えを伝えるための技能や発達段階に応じた思考力を育てたことにより、話し方の基本を押さえて個性豊かに表現できるようになった。
- 年間指導計画に音声言語にかかわる指導を位置付け、見通しをもって指導することができるようになった。

< 課 題 >

- 音声言語教材を活用することにより、どのような思考力を育てることができるか更に明らかにする。
- 教材の開発を更に進める。特に、聞くことに重点を置いた教材、独話に重点を置いた教材対話から更に多人数への話し合いに広がる教材など、それぞれの場面に適した教材の充実を図る。
- 児童の言語環境の整備を一層進める。特に、言語環境の中心としての教師の話し言葉そのものに磨きをかけ、望ましい語りかけについて工夫する。

I 研究主題設定の理由

主体的なコミュニケーションの担い手として「よい話し手」「よい聞き手」を育てるための指導法の開発が強く求められている。教科書の音声単元はもちろん、対話や話し合い活動などを取り立てて指導するような直接的な取り組みもなされている。

しかしながら、児童の中には、発音が弱々しく不明瞭である、単語の羅列で会話を済ませてしまう、乱暴な言葉遣いをする、平板な発音で鼻濁音がうまく発音できない、といった実態も見られる。自分の思いや考えを適切に伝えるためには、まず相手に分かるようにはっきりと話す態度や技能を身に付けることが大切である。したがって、これからは児童の話し言葉の現状にも着目し、適切に話すことの基礎となる発音・発声や言葉遣いに関する指導を一層重視する必要があると考える。

そこで、本分科会では、児童が音声表現の中で最も好む「音読」を取り上げ、児童が教材中の言葉を生き生きと音読しながら自己を適切に表現する力を身に付ける指導法について追求することにした。

II 研究のねらい

音読技能の高まりは話す意欲や活動と大きな相関を持ち、読み手としての自己を高めることが「よい話し手」としての素地を培うことに強く結びつくものと考えられる。つまり、児童は教材中の精選された言葉に深くかかわることによって、語いを豊富にし、言語感覚を磨き、適切な言葉で表現できるようになると思われる。このような仮説に立って、低・中学年期の音読指導を次の観点から工夫する。

- 低学年段階から、相手や目的を意識した表現読みとしての音読を積極的に取り入れる。
- 音読の交流を中心に教材を読み深めるとともに、読み取ったこと、感じたことなどを自分の言葉で表現し合う場を設定する。

III 研究の内容

1. 基礎研究……音読・朗読の系統表の作成

学習指導要領の音読・朗読に関する指導事項を分析するとともに先行研究も参考にしながら「相手や目的を意識して読む」という観点から各学年の重点を整理した。(次頁)

2. 調査研究

(1) 音読技能の実態調査(分科会構成の1～4学年の5学級で実施)

児童一人一人の音読を録音しながら、上記系統表にある観点から診断的評価を行い、音読技能と話す意欲との相関性を探った。

(2) 国語科の学習における意識調査(上記(1)の学級で実施)

低学年では話すことに意欲を示し表現活動も活発に行っているが、4年生になると苦手意識をもつ児童が多い。音声言語表現の中では音読は極めて抵抗が少なく、黙読よりも好まれている。音読では聞き手の存在が重要で、表現意欲と深く結び付いていることが分かった。

相手や目的を意識して表現する音読・朗読の系統表

観 点	声を出して読む				語や文として読む	気持ちを含めて読む		表現する態度 (学習指導要領)
	発音発声	音 量	速 さ	句 読 点	語 句 , 文	地の文と会話文	想像と読み	
一 年	・幼児音を使わないで、はっきりした発音で読む。 ・姿勢に気をつけて発声する。	・みんなに聞こえるような声の大ききで読む。 ・微音読の練習も行う。	・相手に分かるように、ゆっくり読む。	・点、まるに注意して読む。	・ことがらと文字とを一致させて読む。 ・言葉のリズムに気をつけて読む。	・「 」に注意して読む。	・人物の気持ちや場面の様子を思い浮かべながら、楽しんで読む。	・すすんで表現する。
二 年	・口をよく開いて、はっきりした発音で読む。 ・長音拗音、促音、撥音を正しく発音する。	・聞き手によく分かるように、適当な声の大ききさでよむ。	・ゆっくりとつかえずに、話すように読む。	・正しく区切り、あいだをおいて読む。	・語句の意味を考え、語として読む。 ・響きのよい言葉に気をつけて読む。	・地の文と会話文を区別して読む。	・人物の気持ちや場面の様子を叙述に即して想像し、登場人物になったつもりで読む。	・正しく表現する。
三 年	・なまりやくせのない、はっきりした発音で読む。	・みんなに分かるように場に合った声の大ききさで読む。	・つかえずに、よく分かるように読む。	・読点までつづけて読み、句点ではあいだをおいて読む。	・文の意味を考え、語句として読む。 ・相手を意識して読む。	・地の文と会話文を、聞き手に分かるように工夫して読む。	・人物の性格や場面の情景を叙述に即して想像し、気持ちをこめて読む。	・分かりやすく表現する。
四 年	・なまりやくせのない正しい発音で読む。	・目的に応じて、適切な大ききさで読む。	・目的に応じて、適切な速きさで読む。	・内容に合わせて、句点や読点を生かして読む。	・文の内容を考えて、語や文として読む。 ・相手や目的を意識して読む。	・地の文と会話文を文の内容を考えて、気持ちをこめて読む。	・人物の気持ちの変化や場面の移り変わりを叙述に即して想像し、読み方を工夫して読む。	・中心点分かるように表現する。 ・内容を整理しながら表現する。
五 年	・正しい発音で読む。	・目的や内容に応じて適切な大ききさの音量で読む。	・目的や内容に応じて適切な速きさで読む。	・内容に合わせて、句点や読点を適切に生かして読む。 ・意味の上での間を工夫して読む。	・語句を文の意味の中で生かして読む。 ・言葉の抑揚、強弱に気をつけて、語調を考えながら読む。	・地の文と会話文を、文の内容を考えて気持ちや情景がよく分かるように読む。	・人物の気持ちや場面の情景を叙述した描写のもつ内容や表現のよきを感じとり、味わいながら読む。	・相手や場面の状況を考えて表現する。 ・主題や要旨のはっきりした表現をする。
六 年					・イントネーション(文末、句末)に気をつけて読む。 ・文全体の強弱、高低に気をつけて読む。	・聞き手にもよく内容が味わえるように朗読する。	・優れた描写や叙述を支える語句や文、文章の組み立てに目をむけて、味わいながら読む。	・適切で効果的な表現をしようとする。 ・目的や意図に応じた表現をする。

3. 音読技能を高める実践

(1) 音読の基礎練習

口の体操、言葉遊び、フラッシュカード、詩の暗唱、相互批評など、様々な活動を取り入れながら、基礎・基本としての発音発声の練習を根気よく繰り返す。

(2) 自己評価、相互評価のできる音読カードの作成と活用

音読の系統表に基づいて、児童が個々にめあてを立て、聞き手を意識しながら音読ができるようにするとともに、励みとなり意欲を向上させる友達との聞き合いをする。

(3) 音読の根拠を明確にし、自己の表現を一層確かにするための音読ノートの活用

教材文の行間に書き込みができるノートを作り、読解の過程で自分の思いや考えを自由に書き込むことで、気持ちを込めて音読する根拠を明確にする。

(4) 相手意識、目的意識をもつための場面の設定

① 単元構成の工夫

ア. 段落ごとに読み進める学習において、例えば、中心場面では2時間扱いとし、前時を読解、後時を音読表現を主にするなど、幅を持たせた弾力的な単元構成を計画する。

イ. 単元の最後に、音読発表会をしたり、役割読みの録音お話しテープを作ったり、紙芝居を作ったりするなどの終末の活動に対するイメージを明確にして学習を展開する。

② 一単位時間の工夫

ア. 毎時の目標を、児童の読みの目的になるように焦点化する。

イ. 適切に自己を表現するための場面の設定として、目的を達成するための表現活動や相手を意識させる表現の形態などを指導案に明記し、支援や評価を工夫して授業を進める。

ウ. 録音テープで、初めの読みと学習後の読みの変容を客観的に比較させ、意識付ける。

エ. 授業を相互指名で進め、相互評価する場を多く設定して、友達との表現の違いに気付いたり、よりよい表現を目指して話し合ったりする場面を多く取り入れる。

IV 実践事例

単元名 —— 気持ちを考えながら —— 「お手紙」 (2年生)

本時の指導 (15時間扱い 本時8/15 *前時は第三場面の読解を中心とした授業)

目 標 手紙が来るのを待つかえるくんと、あきらめているがまくんの気持ちの強まりが伝わるように工夫して音読する。

展 開

◇支援 ◎評価

表 現 (学 習) 活 動	表 現 する 内 容 ・ 方 法	表 現 する 形 態	支 援 と 評 価 の 観 点
1. 発音発声練習をする。			◇正しい発音、発声ができるように、姿勢、口形について助言する。 ◇音量、速さに注意するように助言する。
2. 音読を工夫する。 ○本時のめあてを確かめる。	・本時の学習を知り、めあてを確かめる。		
かえるくんとがまくんの気持ちの強まりが伝わるように読み方を工夫しよう。			

(1)前時の読み取りをもとに、学習場面(第三場面)を音読する。	・手紙が来るのを待つかえるくんと、あきらめているがまくんの様子を思い起こす。	一人読み	◇繰り返し叙述される「かたつむりくんは、まだ、やってきません。」を思い起こさせ、各自ゆっくり、はっきり読むように助言する。
(2)かえるくんとがまくんの気持ちを考え、読み方の工夫を音読ノートに書き込む。	・自分の言葉で、どのように読んでみたいかをノートに書く。	音読ノート	◇机間指導をして、書き込みができない児童に対して助言する。
(3)どのように読むと、気持ちの強まりが相手に伝わるかを話し合う。	・自分の思いを自分の言葉で発表する。 ・自分の意見と比べながら、友達の意見を聞き、読みを考える。	話す 相互指名	◇物語文の叙述を手がかりに考えるように助言する。
(4)友達の意見を自分の読み方に生かして音読練習する。		一人読み	◎友達の意見を聞き、自分の読みについて考えを深めているか。
(5)小グループ(三人組)になってお互いの読みを確かめ合う。		相互評価を生かした読み	
3.工夫した音読を発表する。			
(6)音読発表の形態を三人で話し合う。	・「一人読み」「役割読み」「グループ読み」など、自分たちに合った表現形態を考える。	話し合い	◇机間指導をして、個々の読みに応じた表現形態の選択方法を助言する。
(7)音読発表をする。	・いくつかのグループが音読発表をする。	グループ読み 役割読み 一人読み	◎聞き手を意識して、気持ちを込めた音読ができたか。
4.相互に評価し合う。			
(8)友達のいいところ、自分のいいところをワークシートに書く。	・本時の学習について自己評価し、友達のよい面を確認する。	ワークシート	◇書けない児童に助言する。 ◎友達のいいところ、自分のいいところを自分の言葉で書くことができたか。
(9)友達のいいところ、自分のいいところを発表する。	・本時の学習について相互評価し、ふり返る。	話す 相互指名	
* (1)~(9)は本時の表現活動			
○次時の学習内容を知る。	・次時の予告を聞く。		

V 研究の成果と今後の課題

1. 成果

- (1) 音読に慣れ親しみ、言葉を声に出すことの楽しさを味わい、授業や生活が活気づいた。
- (2) 音読、朗読の系統表の作成や音読カードを使った学習によって、児童は聞き手を意識し、系統表に示された観点を個々のめあてとして、学習が進められるようになった。
- (3) 発表の場面を多く設定し、音読ノートを活用しながら相互指名による読解の授業を展開する中から、友達の意見を聞く楽しさ、自分の意見を理解してもらう楽しさを知り、発言することに抵抗を持っていた児童も、よりよい表現を目指すようになった。

2. 今後の課題

- (1) 実態調査の対象を広げ、多くの児童の実態に即した研究の見直しが必要である。
- (2) 音読・朗読の系統表を、相手意識、目的意識をより強調した内容に改めていく。
- (3) 実生活の中で、場面に応じた効果的な話し方ができる児童を目指し、今後は、「自己を表現する力」を個々の自信に結び付ける支援の在り方を探る。

I 研究主題設定の理由

話すことの技能は思考力とかかわっている。特に高学年では、目的にそった適切な話し方ができるとともに、自分の考えを論理的にまとめて話す力を身に付けることが求められている。こうした資質や能力を育成するためには、話すこと・聞くことを関連的にとらえ、児童が相互に考えを深め合う場としての話し合い活動を活発に展開することが大切である。

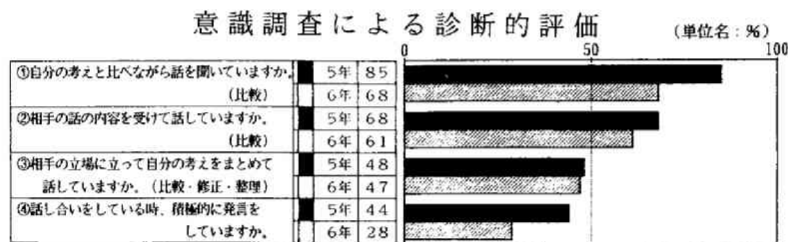
そこで、本分科会では、読んだことを話すことにつなげるという観点から説明的文章の読みの過程に話し合い活動を位置付け、児童がその文章を手がかりとして明確な論拠に基づいて話し合いができるようにした。さらに話し合い活動を設定するに当たっては、収束的な話し合いと拡散的な話し合いの二つを学習過程に取り入れることが有効であると考えた。前者は読みを確かにするための叙述を根拠とした話し合いであり、後者は確かな読みを目指すなかで考えを再構築したり広げたりする話し合いである。こうした学習を通して、児童は論理的に自分の考えを深め、適切に自己を表現することができるようになるものと考えた。

II 研究のねらい

- (1) 話し合いにおける思考の三要素を「比較・修正・整理」ととらえ、それらを含んだ話し合い活動の展開を工夫する。
- (2) 話し合い活動に説明的文章を取り入れる際の選択の観点を示すとともに、教材として活用したことの効果を検証する。

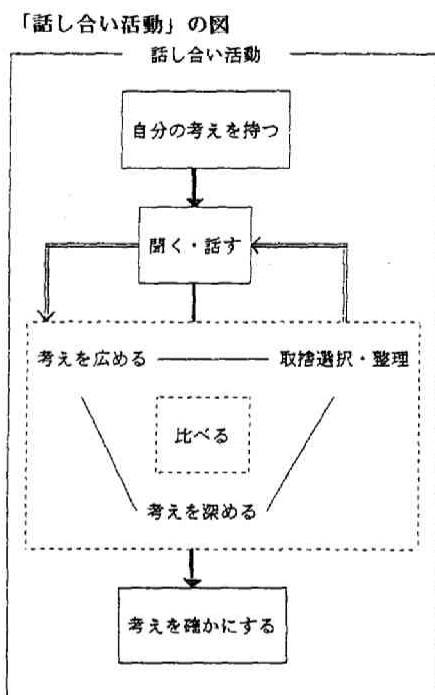
III 研究の内容

1. 意識調査による診断的評価（5・6年生児童286名対象 9月実施）



話し合いについての意識調査では、「積極的に発言していますか」という問いに対しては、5年生では44%、6年生では28%が「はい」と答え、学年が上がるにつれて発言が減る傾向にあると言える。また自己評価も学年が上がるほど厳しくなっているということが、①～④の結果から読み取れる。特に「自分の意見と友達の見解を比較しながら聞いているか」ということについては、5年生と6年生とでは20%近くの開きがある。しかし厳しく自己を見つめている6年生でも約7割の児童が、自分の意見と比較しながら聞いていると意識している。それに比べ、③の結果のように、「比較・修正・整理」の三要素が入ると話すことの難しさを意識する児童が多くなり、話し合いをする中で考えをまとめて話すことの難しさを約半数の児童が実感していることが分かる。このような点から、上記の三要素を含んだ話し合いができるような児童を育成することが重要であり、指導法を工夫していく必要があると考える。

2. 「話し合い活動」を意識させる手立て



話し合い活動において児童が考えを深め確かなものにするためには、話し合うことによって自分の中でどのような思考がなされ、その結果どうなるのかということ、児童自身にもはっきり意識しておくことが大切である。そこで話し合いにおける思考の働かせ方を図に表し教室に掲示することで常に児童が意識できるように工夫した。この図は、「聞く・話す」活動が繰り返されることによって自分の考えがより一層確かになるということを示している。

個人の学習によって得られた考えは、話し合い活動において、他の考えと比べられる。さらに、「広める」「深める」「取捨選択・整理」という思考操作を繰り返す中で様々な思考が働き考えが確かになっていくものと思われる。

3. 教材選択の観点の設定

話し合い活動に適した説明的文章を次の観点から分析し、それぞれの文章の特徴を生かしながら教材化を図った。

・ 文章構成

説明的文章が持つ次のような構成の特色を生かし教材を開発する必要がある。

- ① 時間・空間の順序による構成
- ② 根拠と意見・感想による構成
- ③ 詳細な叙述による構成（全体から部分への構成）
- ④ 比較による構成
- ⑤ 疑問と解決による構成

①の構成は、児童の思考の中で筋道が無理なく追える。③の構成は話し合い活動の場面で、より身近な話題と結び付けるなどの工夫が必要となる。また、②④⑤が複雑に組み合わせられて構成されている文章は読解の時間を十分に確保する必要がある。

・ 文章の内容

文章が持つ内容的価値を、児童の生活経験や他教科等との関連という観点から選択する。その文章を基に学習することで話し合い活動が活性化し、各自の考えが広がり深まるようにする。

・ 文章量

話し合い活動の時間を多く確保するために、文章量は多すぎないことを原則とする。

（100行程度を目安とした。）

【教材分析例】

	文章構成					内容的価値	文章量	活動例
	①	②	③	④	⑤			
覚えることと忘れること (5年光村)			○		○	記憶について科学的に説明することで、日常生活を見直すことができる。	92行	よりよい記憶術について考える。
ことばと文化 (6年東書)		○		○		言語や習慣を比較することで、身近な言葉をとらえ直すことができる。	107行	言葉や習慣について考える。
生命を見つめて — 手塚治虫 (6年学図)	○				○	児童の生活と密接な題材であり漫画に対する新しい視点をもつことができる。	121行	新しい視点に立った作品研究。
生きている土 (6年教出)		○			○	土について見つめ直すことで広く環境問題について考えることができる。	99行	身近な環境をどう守るか考える。

IV 実践事例

1. 単元名 「手塚治虫研究発表会をしよう」
2. 教材名 「生命を見つめて — 手塚治虫」
3. 研究主題との関連

自分の考えを確かにするためには、話し合いによって自分だけでは気付かなかった面に気付いたり、対立する意見に触れて考え直したりして、考えを広め・深めることが大切である。話し合い活動は、音声言語として自分の考えを表現するにとどまらない。表現したことに対する反応を基に再度自分の考えを構築し、初めに表現したものから更に広まったり深まったりした考えを表現していく作業である。そこで、本単元では自分の研究課題をつかむための話し合いと、まとめるための話し合いを設定し、互いに話し合う中で比較・修正・整理を繰り返し自分の考えが確かになるように工夫した。

4. 学習計画の概要 (全8時間)

時	学習活動と話し合いの活動	教師の支援
1	手塚治虫研究への意欲を持つ。 <フリートーク>	話し合いのためのメモを用意する。
2 3	教材文を読み、学習計画を立てる。 各自読み進める。	ワークシートを用意する。 研究課題に発展メモ欄を設ける。

4	各自が読み取ったことを基に、内容を正確につかむための話し合いをする。	話し合いが焦点化するよう言葉かけをする。考えを修正する時間を確保する。
5	手塚治虫の生涯や業績・漫画に対する思いについて話し合い研究主題をつかむ。〈グループ・全体での話し合い〉	比較しながら話し合うよう言葉かけをする。考えを整理する時間を確保する。
6	研究課題に沿って学習を進める。	研究の仕方についての例を示す。
7	調べたことを基に、課題別グループで話し合い、自分の考えを確かにする。〈課題別グループ話し合い〉	話し合っ分かったこと、修正した考えなどについて取捨選択をしながら、自分の考えを確かにし研究課題をまとめるように指示する。
8	「手塚治虫研究発表会」をする。	多様な研究の方法を認め励ます。

5. 考察

- ① 話し合いの前に自分の考えをまとめる時間を確保することによって、話し合いに対する姿勢が積極的になり、自分の考えを発表することができた。
- ② メモを取ることによって、自分の考えと友達のことを比べながら聞く姿勢が持てるようになり、さらに自分の考えを修正・整理することもできるようになった。

V 研究の成果と今後の課題

本分科会では、説明的文章を表現力育成のための有効な教材ととらえ、「適切に自己表現できる話し合い活動の指導」の研究を進めてきた。その成果と今後の課題は以下の通りである。

<成果>

- ① 「話すこと・話し合うことに関する意識調査」による診断的評価を基に「比較・修正・整理」の三要素を児童に意識させた話し合い活動の指導を工夫することができた。話題の選定・目当ての設定・形態の変化によって児童が学習に必然性を感じ意欲的に取り組んだ。
- ② 「話し合い活動」を図示したことで、児童が思考を働かせる場としての意味を理解し、目当てをもって話し合いに参加する態度も見られるようになった。
- ③ 表現力育成のための教材として説明的文章を分析した結果、教材選択の観点がはっきりし話し合い活動に有効に活用できることが明らかになった。
- ④ 三要素を含んだ話し合い活動を繰り返すことによって児童の考えが確かになりその考えを基に活動できるようになった。このように行動決定できるようになる話し合い活動が自分の考えを確かにするための話し合い活動であると言える。

<今後の課題>

- ① 説明的文章を表現力育成のための有効な教材として意図的・効果的に活用するために、年間指導計画を見なおすこと。
- ② 話し合い活動の学年に応じた指導内容について、系統性を明らかにすること。
- ③ 話し合い活動において児童が自分の考えを確かにするための支援の在り方を更に工夫すること。

I 研究主題設定の理由

高学年になると学習をはじめ学校生活全般の話し合いにおいて、相手や目的に応じて的確に話したり、相手の話を正確に聞き取ったりする力が必要になる。このような話し合い活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりしながら、課題を解決することが求められる。

しかし児童の実態として、「表現しようと思っても、何をどのように話したらよいか分からない」といった悩みや、「自分の生活や意見と比べながら聞くこと」等についての意識の不足が見られる。話し合いの意図や利点が十分生かされていないことが分かる。また教師側の問題として、「相手の話をどのように受けて考え、いかに発言につなげていくか」という、話し合うことそのものに対する指導が十分に行われているとは言えない。

こうしたことから、児童には学習に対する興味・関心をもたせ、話し合う相手や目的に応じて表現することの必要感をもたせること、話し合いを通して論理的に考えることの大切さに気付かせ、自分を高めていく充実感をもたせることなどが課題である。また教師としては、話し合うための手立てや形態を工夫するとともに、学年の発達段階に応じた指導のねらいを明確にし、系統的に指導することが必要である。

以上のような話し合い活動を、学習過程に意図的・計画的に取り入れることにより、自分の考えを広げ、深めることのできる能力や態度を育てたいと考え、本研究主題を設定した。

II 研究のねらい

「話し合い活動における適切に自己を表現する力」を次の視点から育成する。

- ・話し合う必然性をもたせた話題を設定し、児童が意欲的に表現活動を行えるようにする。
- ・内言活動（自己内対話）を構造的に示し、意識化させることで、論理的思考力を高める。

III 研究の内容

1. 相手や目的に応じて適切に表現することについて

話し合い活動において「適切に表現する」とは、相手や目的に応じて伝えたい内容を相手分かりやすく、納得するように話すことである。ここでいう「相手に応じて」とは、

- ・相手の知識や経験を考え、自分との共通点や違いを意識しながら話すこと。
- ・伝えたい内容が相手に理解されているかを判断しながら話すこと。

である。一方「目的に応じて」とは、

- ・伝達・説明・報告・紹介の目的をはっきりさせて話すこと。
- ・課題に応じて内容を選択し、言葉の使い方や構成の仕方を工夫しながら話すこと。

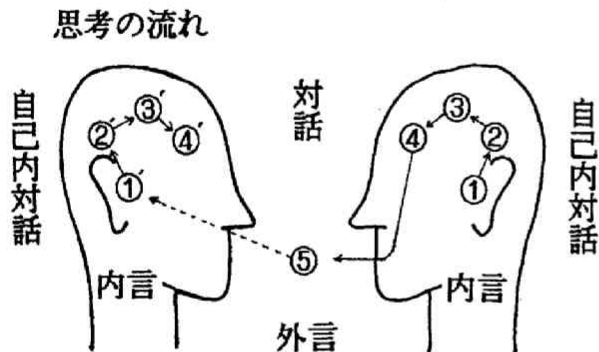
ととらえる。また話し合い活動では、その場を構成する要素にも大きく作用されるので、人数や集団の特性、雰囲気等に応じて話す態度を身に付けることも必要である。

さらに、話し合い活動を通して相手に自分の思いや考えを伝える際には、自分なりに表現し、相手との共通理解を図っていこうとする態度も大切である。一人一人の児童が個性を発揮して、いかに表現していけばよいかを判断しながら、自分の考えを広げ、深めることのできる話し合い活動を目指していきたい。

2. 自己内対話（自己を表現するための内言活動）について

(1) 自己内対話とは

自己内対話は、自己を見つめる内言活動である。下図の②～④は、相手の話を受け止め、自分なりに理解し、次に発言するまでの思考の流れを示したものであり、聞き手が自分自身を見つめ、自分自身と対話したり、声には出さないが相手に語りかけたりする過程である。自己内対話を繰り返すことで自分の考えが深まり、次の外言につながる。つまり、より深められた自分の考えを外言化するための内言活動とも言える。



- ① 相手からの情報を得ようとして聞く。
- ② 多くの情報の中から、目的意識をもって必要な情報を選び受け止める。
- ③ 相手の考えと自分の考えを比べる。
- ④ 新たな情報を加味したり、よい考えを聞いて自分の考えを修正したりして、よりよいものに作り変える。
- ⑤ 作り変えた自分の考えを相手に伝える。

(2) 育てたい思考力と自己内対話との関係について

日頃何気なく行っている自己内対話を児童に意識させることは、自分自身を見つめさせることであり、思考の流れに目を向けさせることである。相手の話を受けて、どのように思考を働かせ自己内対話をすれば、自分の考えを広げ深めることができるかということに気付かせていくことが必要である。具体的には、4頁の系統表に示されたような、対比する、整理する、類推する、因果関係を押さえる、意図をとらえる等の論理的な思考の仕方を身に付けさせ、発言に至ったものはどのように思考したからか、また、相手の話を受けて、どのように考えていったらよいか、等を判断させる場を効果的に設定していく。

(3) 自己内対話を支える学習活動

話し合い活動を通して自分の考えを広げたり深めたりするためには、自己内対話を活発に行うこととともに、話し合いをする以前に、児童一人一人が未完成ながらも自分なりの考えをしっかりと持っていることが必要になる。そこで単元の学習過程に、学習のねらいをもつ、自分なりの考えをもつ、話し合いで考えを広げ深める、考えをまとめるという段階を位置付け、自分の考えが広がったり深まったりすることの充実感をもたせるようにする。

3. 学習活動の具体的な手立てについて

<豊かな自己内対話をするために>

取材活動の充実：自分の考えを作るための取材活動を重視する。学習の手引きを活用し、取材したことを整理し、まとめる時間を確保する。

自己内対話を意識させる指導：補助教材を使って、自己内対話とはどういう活動か、自己内対話はなぜ大切かを理解させる。そして、相手の話を受けてどのように自分の考えを広げたり深めたりしたらよいかを考えさせる。

自己内対話をする時間の確保：聞くことに専念する時間を確保することによって、余裕をもって自己内対話をしながら、自分が発言するということを念頭におきながら、じっくりと考えさせる。

<適切な表現活動を行うために>

教材の工夫と単元構成の工夫：意欲をもって取り組めるように、児童にとって身近で興味がある話題を選ぶ。話し合う目的や見通しをはっきりさせ、個々の児童が自主的に活動できるようにする。

話し合う視点の明確化：論点や視点を明確にするために、自分たちの考えが異なりそうな事柄、深めたい内容を整理させ、一人一人が話し合いの見通しをもつ手立てを工夫する。

形態や相手（構成メンバー）の工夫：・対話（1対1）・会話（3人以上）・独話（1対衆）での形態を目的に応じて選択する。グループの人数を少なくすると、一人一人の話す機会が多くなり、話しやすくなる。構成メンバーは固定しないで、目的に応じて意図的に入れ替えるようにする。

基礎・基本を押さえた話し方の指導：話し方の指導を学習活動の中に適宜取り入れていく。
・学習の始めに、めあてとして話し方のモデルを提示する。
・学習の途中で気付いたことを例として取り上げて話し方を見直す。
・学習のまとめとして反省点を整理するとともに学習したことを生かし、よりよい話し方ができるようにする。

評価の工夫：自己評価、相互評価、支援と結び付いた教師による評価を効果的に取り入れ、様々な角度から児童を見つめ、認め、励ましていくことを心がける。

IV 実践事例

1. 単元名 30年後の子供たちに、私たちのメッセージを送ろう

2. 単元の目標

○経験したことを根拠にして、話すことができる。

○取り上げられた話題の内容の経過や因果関係を押さえながら聞くことができる。

○自分の経験や別の事例を当てはめたり、比べたりしながら話の内容を聞くことができる。

3. 研究主題との関連

<豊かな自己内対話をするために>

・ 単元の途中に、自己内対話を意識させる基本指導の時間を取り入れる。

・ 他のグループの話し合いを聞くことを通して、よりよいアドバイスをするために、自己内対話をしながら自分の考えを作る時間を設定した。いつ会話に入り込むかを考えずにすむので、余裕をもって自己内対話をするができる。また、そこで考えたことを、少人数で話し合う時間も設定した。

<適切な表現活動を行うために>

・ 30年後を想像しながらメッセージを作成し録音するという、児童にとって魅力ある活動を取り上げる。

・ メッセージのテーマ別に、プロジェクトチームを作成する。話しやすくするため、チームは4人で構成し、チームの話し合いを全体に伝えるための伝言板コーナーを設置する。

・ 話し合う中で、話し方の問題点に気付かせ、めあてをもって取り組めるようにする。

4. 学習の流れ (本時 4 / 8 時)

学 習 活 動	
前時	○自己内対話のモデルを示した資料を用い、自己内対話について意識し、練習する。
本時	○ねらいをもつ「みんなの意見を取り入れてよりよいメッセージを作ろう」 ○プロジェクトチーム(以下P)のうち半分は、本時のオブザーバー(以下O)になる。PとOが1組ずつ組んで今日の活動を進める。 P○どんな内容でメッセージを組み立てるか話し合う。 ・どんな例を入れるか。 ・どんな解決策があるか。 など ○Oチームの話し合いを黙って聞く。 <自己内対話の時間> ・取り入れたいことは何か。 ・もう少し聞きたいことは何か。 ○今までに出たことについて、一緒に話し合い、共通点、問題点を見つける。 ○話し合ったことをPチームの伝言板にまとめる。 ○話し合っよかったことなどを全体で話し合う。
	O○Pチームの話し合いを黙って聞く。 <自己内対話の時間> ・例は適切か。他の例はないか。 違う考え方はないか。 などの視点 ○Pの話し合ったことについての感想や意見を出し合う。 ・こんなことも入れるとよい。 ・こういう考え方もあるよ。

V 研究の成果と今後の課題

<成 果>

- 学習の目的や相手意識をはっきりさせるとともに、学習過程に、自分なりの考えを作る時間を位置付けたことは、児童の意欲を高めることにつながった。
- 話し合う必然性を持ち、友達の考えを尋ねたり求めたりする点を明確にすることで、自分の考えと比べながら聞く態度が見られた。自分の経験を引用した発言もあり、自分の考えを広げ、深めていることが分かる。話し合いに楽しさを感じる児童も出てきた。
- 自己内対話を意識化させる補助教材を作成した。教材の内容は十分とは言えないが、児童に、相手の話を受けた発言や、話を最後まで聞こうとする姿勢が見られた。

<課 題>

- 話し合い活動で育成すべき能力を明らかにするために、聞くこと・話すことの具体的な評価の観点を作成したが、不十分な点が多く、今後の実践と考察が必要である。また話し合いの態度・技能を身に付けるために、日常の学習活動との関連も図りながら、基礎・練習・応用の学習活動についても工夫する。
- 音声言語の瞬時に消えるという特質を踏まえ、今後は、話し合い途中の支援についても工夫する必要がある。